



ティアフォーの「Aパイロット」

レベル4の認可取得

ティアフォー(加藤真平社長、東京都品川区)は、同社の自動運転システム「Aパイロット」が「レベル4」(特定条件下での完全自動運

転)の認可を取得したと発表。歩行者と一般車両が混在する環境で、道路インフラに頼らずに自動運行装置が自律的に認知・判断・操作するシステムへの「レベル4」認可は国内初だという。

同社がシステム開発と運用をしていた物流拠点、GLPアルファリンク相模原(相模原市中央区)の敷地内で、道路交通法が適用される道路で認可を得た。Aパイロット

Aパイロットでレベル4走行する自動運転バス

トは、同社が開発するオープンソースの運転ソフトウェア「オートウェア」やセンサー、コンピューター、車載情報通信システムから構成される。

同社は、政府が掲げる「2025年に50拠点、27年に100拠点以上」の自治体への自動運転システムの導入をリードするとともに、今後の電気自動車(EV)の量産開発にも活用するとしている。レベル4認可取得のプロセスや設計は全て公開するという。

東海理化の電子

ミラーを搭載

ティアフォーは、「レベル4」(特定条件下における完全自動運転)の認可を受けた

自動運転車に、東海理化の電子ミラーを搭載したと発表した。両社は提携し、センサーを妨げることなく死角を減らせるミラーを開発した。

レベル4は、特定条件下での走行のため、手動運転時にはミラーが必要となる。車両にはセンサーを多数搭載しており、視界を妨げたりノイズを生んだりする恐れがあった。両社は、自動運転システムと並行して電子ミラーを開発し、検知センサーの死角低減と後側方の視界の確保を両立させた。

両社は、今後も「レベル4走行車両に必要な機器を開発し、自動運転車の安全性と機能性向上に貢献する」としている。